国際ロータリークラブ第2730地区

日南ロータリークラブ

~NICHINAN ROTARY CLUB since 1954 ~

2025-26年度クラブスローガン「臥薪嘗胆」

WEEKLY　REPORT　NO.18

第 3445回 例会		開催日：2025年11月26日（水）			点鐘12:45
国歌		会員数	33	MU	1
ロータリーソング	それでこそロータリー	出席免除	9(5)	欠席	4
4 つのテスト	田島逸男君	HC出席	23	出席	24
ゲスト		出席率	85.71%	先取MU	黒岩
		出席免除	落丸、清水、古澤、渡邊、日高		
ビジター		欠席者	稲垣、榎木田、竹井（克）、豊田		
例会行事	会員卓話				

会長時間（斎藤篤史会長）

皆さま、こんにちは。本日は「勤労感謝の日」に合わせまして、『昭和・平成・令和でここまで変わった働き方』というお話をさせていただきたいと思います。勤労感謝の日と聞きますと、「働く人に感謝する日」という印象が強いですが、実はこの祝日、意外と奥が深い歴史があります。もともとは「勤労感謝の日」ではなく“新嘗祭（にいなめさい）”と呼ばれ、天皇がその年の収穫物を神さまにお供えし、感謝する日でした。つまり本来は、「働く＝自然の恵みをいただき、生きていくための行為」だったわけです。農業中心だった日本では、休むことも、働くことも自然のサイクルとともにあり、収穫できたのは“運”でも“奇跡”でもなく、みんなが協力した結果でした。時代が進み、働き方は大きく変わりました。しかし、“働くことへの敬意”だけは変わってはならない。今日はそんなテーマを、昭和・平成・令和という時代の変化を交えながら、皆さんと楽しく振り返っていきたいと思います。まずは昭和です。昭和を一言で表すなら、やはり 「根性」 でしょう。高度経済成長期。街は活気にあふれ、未来がどんどん明るくなっていく。「仕事すればするほど国が豊かになる！」そんな熱気がありました。昭和の働き方といえば、とにかく “働く時間が長い”。朝は 7 時に出社、夜は定時があってないようなもの。終電まで働くのは珍しくなく、むしろ誇らしいこととされていました。しかも昭和には、今では考えられない研修もあります。ある会社の新人研修では「海岸を走らされる」ということもあったらしいです。また、昭和の職場文化といえば 「飲み会」 が外せません。あれはもう「参加」ではなく「参戦」でした。「今日は軽く一杯」という言葉の裏には「絶対軽く終わらん」とい

う暗黙の了解があり、先輩のお酌を断るという選択肢は存在しません。そして昭和のもう一つの特徴が、“見て覚えろ”文化。マニュアルも手順書もなく、上司の背中を見て技を盗む。説明されないから、わからなくても聞けない。でもそれを乗り越えたときに得られる達成感は大きく、「仕事はついて学ぶんだ」という価値観が生まれていました。もちろん、昭和が良かった点も多くあります。・仲間同士の団結・共通体験が多い・人間関係が濃い・“顔を合わせて話す”文化が強固だから昭和は誤解が少なかったとも言われます。怒られることも多かったが、怒っている人の顔がちゃんと見えていた。顔が見えるから安心できた。そして、なんやかんやで最後は笑い話にできた。ただ、昭和の文化は今の基準では「働きすぎ」です。「働き方改革」どころか、「働き方強化」の方が近かったかもしれません。それでも昭和の人たちは、そこに喜びや誇りを感じていました。“みんなで汗をかいて仕事をする”という価値観。これは時代が変わった今も、どこかで求められているのではないでしょうか。さあ、次は平成です。昭和の「熱気」から一転し、平成は 「合理性」「効率」「IT 化」 の時代に入ります。バブル崩壊、就職氷河期、リストラ…日本全体の働き方に大きな変化が訪れます。昭和では「長く働く＝頑張ってる」でしたが、平成では 「効率よく働く＝カッコいい」 という価値観が生まれました。パソコンが普及し、Excel が急に職場のスターになります。Excel の関数が使えるだけで、「おっ、あいつはデキるな…」と評価されていた時代です。また、メール文化が職場を席巻しました。昭和は対面や電話中心でしたが、平成は文章の時代。メール 1 本で全てが決まる。平成の新人研修で象徴的なのは、「ロジカルシンキング講座」。でも実際、ロジカルではない人がロジカルを学ぶと、だいたい“屁理屈が強い人”になります。これは多くの企業で共通した現象です。平成は“合理性の時代”と言われますが、人間同士の距離は昭和より確実に遠くなりました。効率を求める分、コミュニケーションは簡略化され、「人間味」は少し薄くなっていく。そして平成の終盤には、「働き方改革」という言葉 が広まりました。長時間労働の是正、休暇取得の推進、メンタルヘルスの重視…。昭和の時代にはなかった「働く人を守る仕組み」が整っていきました。平成は、人々が「働くこと」そのものを見直し始めた時代とも言えます。そして令和。ここまで劇的に働き方が変わるとは、誰も予想しなかったでしょう。コロナ禍によって、働き方は完全にリセットされました。テレワーク、オンライン会議、チャットツール…。「会社に行く」という常識が揺らぎました。令和のキーワードは、「多様性」「心理的安全性」「デジタル」の 3 つです。若い世代は特に、“意味のないこと”が苦手です。会議 1 つとっても、「その会議、本当に必要ですか？」と普通に言います。昭和の人からすると信じられないかもしれませんが、令和世代は“休むことも仕事のうち”と考えます。効率よく仕事を進めるための休息…。これは科学的にも正しい。また、令和は 「人間がするべき仕事」「AI がやるべき仕事」 が明確になり始めています。議事録、資料作成、スケジュール調整など、面倒な仕事は AI が担い、人がやるのは「判断」「創造」「関係づく

り」。そして令和の最大の特徴は、「無理をしない」という価値観です。・できないと言える・体調が悪ければ休む・仕事より家族・“幸せに働くこと”がゴール、昭和のような「根性」はなくなりましたが、代わりに「持続可能な働き方」が生まれました。ここで一度、三つの時代を改めて見てみましょう。● 昭和：とにかく働く、● 平成：効率よく働く、● 令和：幸せに働く、価値観は変わってきました。しかし、よく見ると三つの時代には共通点 があります。どの時代も“誰かの役に立ちたい”という気持ちが働く原動力になっている。仕事とは本来、「人の役に立つ喜び」を得るためのもの。その軸は、どれだけ時代が進んでも変わらないのだと思います。最後に、この日にあらためて考えたいことがあります。それは、働けること自体が尊い という事実です。世の中には、働きたくても働けない人もいる。健康、環境、家庭、災害…さまざまな理由で“働くというステージ”に立てない人がいます。だからこそ、働けるというのは才能であり、恵みであり、そしてありがたいことなんです。働くことで、人とつながり、社会の一員として生きられる。勤労感謝の日は、「働く人に感謝する日」でもありますが、同時に“働ける自分にも感謝する日”ではないかと思います。
最後にひとつだけ…。昭和時代の人は「働けるうちは幸せだ。働けなくなったらヒマすぎて困るぞ」とよく言っていました。ところが令和の若者は平気でこう言います。「働けるのは幸せです。でも、休めるのはもっと幸せです」と。いや、どっちも正しいんです。でも、それを正面から言える令和世代、やっぱり強いです。昭和の根性、平成の効率、令和の多様性。どれが一番ということではなく、全部合わせてちょうどいいのかもしれません。今日、この場でともに過ごしている皆さんも、それぞれの時代を生き抜いた“働くプロフェッショナル”です。勤労感謝の日に、あらためてお互いの“働き”に、そっと拍手を送りたいと思います。本日はご清聴、ありがとうございました。

幹事報告（菊池希樹幹事）

１．再度のご案内
　第３回奉仕プロジェクト部門勉強会（ZOOM）が開催されます。皆様も参加できますので、希望される方は１２月１０日(水)までに事務局までご連絡ください。
２．１１月１９日に開催しました、「わかば奨学金」授与式の模様が、１１月２５日付で宮崎日日新聞に掲載されておりました。
３．１２月１０日夜間例会（年次総会・忘年会）出席確認について

－ 会員卓話（峰松俊夫君） －

本日の卓話では、2008 年に日南ロータリークラブが釜山港都ロータリークラブ（韓国 3660 地区）と共同で取り組んだ国際奉仕「マッチング・グラント」の経験、そしてロータリーが世界的に推進しているエンド・ポリオ・ナウの活動、さらにはポリオと生涯向き合いながらも希望を失わず生き抜いたロータリアン、ポール・アレクサンダー

氏の生き様を紹介したいと思います。
まずは釜山港都ロータリークラブとのマッチング・グラントについてです。マッチング・グラントとは、当時のロータリー財団が行っていた国際奉仕助成制度で、クラブ・地区・財団の寄付を組み合わせて国境を超えた奉仕を実現する仕組みです。現在のグローバル・グラントの前身にあたります。2007-08 年度、釜山港都 RC が創立 30 周年を迎えるにあたり、「記念事業として日南 RC とともにマッチング・グラントを行いたい」とお声がけをいただきました。韓国側から提示された支援先は、釜山市内の児童保護施設「海崗児童館」でした。親のいない子どもたちが生活している施設であり、生活環境の改善に必要な設備支援を一緒に行いたいという提案でした。当クラブは 7,500 ドルを拠出し、2730 地区 DDF からは 5,000 ドルの補助をいただきました。釜山港都 RC も同額を拠出し、ロータリー財団のマッチングが加わることで、最終的には約 40,000 ドル（約 480 万円）という大きなプロジェクトとなりました。入会 3 年目の私にとって、「一つのクラブの寄付が、ここまで大きな国際奉仕につながるのか」と実感した瞬間でした。寄付金は、12 人乗り送迎車両（Hyundai Grand Starex)、エアコン 5 台、学習用テレビ 8 台、食器乾燥器などに充てられ、子どもたちの生活環境改善に直結しました。授与式では当クラブの会員が現地を訪れ、温かい歓迎を受けました。ロータリーの国際奉仕が「心と心をつなぐ活動」であることを、改めて感じた出来事でした。
ここで一旦、話題を変えて、ロータリーが長年にわたり取り組んできた「ポリオ根絶」活動についてお話します。1950 年代の欧米では、ポリオによる呼吸麻痺で人工呼吸器「鉄の肺」に入らざるを得ない多くの子どもたちが病院入院していました。肺の動きを担う巨大な金属の機械の中に体を入れ、頭だけ外に出す生活。自分では呼吸ができないため、機械に命を預けざるを得ません。その光景は、いまの私たちには想像しにくいほど過酷なものだったでしょう。その小児患者の象徴ともいえるのが、アメリカのロータリアン、ポール・アレクサンダー氏です。6 歳でポリオを発症し、以後ほとんどの生涯を鉄の肺の中で過ごしました。身体を自由に動かせない状況でしたが、彼は「舌咽頭呼吸法」という特殊な呼吸法を身につけ、少しずつ鉄の肺の外で生活できる時間を増やしていきました。その後、医療スタッフの力を借りながら大学に通い、法学博士号を取得し、弁護士として社会のために尽くしました。「どれほど絶望的な状況でも、人は希望があれば前に進める」。彼の人生はそのことを静かに、しかし強く教えてくれます。2024 年 3 月に逝去されましたが、その歩みはロータリーがポリオと闘う理由そのものと言えるでしょう。世界では野生のポリオウイルが残る国は、現在アフガニスタンとパキスタンの 2 か国のみとなりました。ロータリーをはじめとする国際的な努力が、ここまでポリオを追い詰めてきたのです。しかし、もう一つ重大な課題があります。それが「ワクチン由来ポリオウイルス（VDPV)」です。経口ポリオワクチンは飲むタイプのワクチンで、腸管免疫をしっかりつけるため、ウイルスが

広がりやすい地域では非常に有用です。しかし、生きた弱毒化ウイルスを使用しているため、人から人へと感染を繰り返すうちに、変異して毒力を取り戻してしまうことがあります。これが「ワクチン由来ポリオ（VDPV)」と呼ばれるものです。
日本では 2012 年以降、注射型の不活化ワクチン（IPV）のみを使用しており、VDPV は発生しません。しかし、野生株が残る国や接種率の低い地域では、OPV を使わざるを得ません。つまり、地域ごとにワクチン戦略を使い分けながら、世界全体でウイルスを追い込み続ける必要があるのです。そして最終的には不活化ワクチンを用いて、ワクチン由来ポリオをも根絶させる必要があります。
最後に 2008 年の釜山港都 RC とのマッチング・グラントは、「小さなクラブの寄付でも、子どもたちの未来を変える力になる」と実感できた忘れられない経験でした。そして、ポール・アレクサンダー氏の生きた軌跡や、現在も続くポリオ根絶への努力を知ることで、ロータリーが掲げてきた“エンド・ポリオ”という目標は、単なるスローガンではなく、「人の命と尊厳を守る活動でもある」と心から理解できます。
日南ロータリークラブが今後も、地域と世界のために奉仕の心を持ち続け、この精神を次の世代へつないでいければ幸いです。

スマイル

田島逸男君：先週は皆様のご理解、ご協力のもと「わかば奨学金」の授与式を無事に終えることができました。授与された学生さんが今後自分の目的を達成さ社会に貢献されることを祈念するとともに見返りは求めないとはいえ、将来「わかば奨学生」の皆さんがいつぞや「日南ロータリークラブ」のメンバーになって貰うことを夢見てスマイルします。

お叱り覚悟?!の４つのテスト(田島逸男君)

会員卓話(峰松俊夫君)

日南RC事務局	〒887-0014　日南市岩崎3-4-2 Itten堀川ビル2階 創客創人センター内
	TEL：0987-22-3363　FAX：0987-22-3515
2025-2026年度	会長：斎藤篤史　副会長：入中英雄　幹事：菊池希樹　雑誌広報委員長：西島元利
	例会：毎週水曜日　12:45~13:30　会場：ホテルシーズン日南（TEL：0987-22-5151）

※例会内でお話いただいた内容の原稿は soumu-nishijima@aisenkai-nichinan.jpまで送信ください。